

## 研究ノート

## 新出『管見』の紹介

吉 海 直 人

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・特別任用教授

## A Bibliographical Introduction to “KANKEN”

YOSHIKAI Naoto

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor

—

薩摩藩（二本松）邸に幽閉されていた山本覚馬が、当時十七歳の野澤雛一に口述筆記させた『管見』は、明治維新以降の近代日本の指針として、明治政府の施策に活用されたといわれている。もしそうであれば、『管見』は何度も書き写されているだろうし、新政府の高官たちに残されたのなら、もっと多方面から評価されていてもおかしくないまい。それにも関わらず、写本が一本しか現存していないことをどう考えればいいのか。そのあたりのことが解明されない限り、『管見』の真の価値も定められないと思われる。

それとは別に、『管見』をまとめた覚馬自身は、後に京都府顧問（囑託）に就任することで、戊辰戦争によって廃墟と化した京都の復興・近代化を具現化していく<sup>①</sup>。それこそが『管見』の有効性を実証した具体例と考えられるので、京都の近代化における『管見』の果たした役割についても、さらなる検証が必要であろう。

そんな重要な資料であるにもかかわらず、同志社においてはこれまでほとんど『管見』の研究は行なわれてこなかったように思える。その最大の要因は、新政府に提出された『管見』の原本が公になっていないことであろうか。そののみならず、その写しの存在についても、どこに存在しているのか長らく不明であった。かろうじて青山霞村著『山本覚馬』（同志社）に『管見』の翻刻が掲載されているが、その翻刻の原本については一切言及されていない。また山本覚馬自身が評価されなかったこともあって、『管見』の翻刻もほとんど参照されないまま長く埋もれていたようである。

その覚馬によく光が当たったのは、NHKの大河ドラマ「八重の桜」であった。大河本としての八重本に便乗するかのよう覚馬の本が、

1 鈴木由紀子『ラストサムライ山本覚馬』（NHK出版）二〇一

二年十一月

2 安藤優一郎『山本覚馬』（PHP文庫）二〇一三年二月

3 早乙女貢『明治の兄弟新島八重と山本覚馬』（新人物往来社）

二〇一三年五月

4 松本健一『山本覚馬』（中公文庫）二〇一三年七月

5 吉村康『闇に虹をかけた生涯山本覚馬伝』（本の泉社）二〇一

三年十一月

と出版されているからである。ただしこれらはあくまで読みものであるから、研究（伝記）とは一線を画しておきたい。

## 二

さて、唯一の翻刻を掲載している青山の『山本覚馬』は、竹林熊彦の稿本「覚馬伝」を元にして書かれたものなので、実際に『管見』を見て翻刻したのは竹林である可能性が高い。だから竹林の稿本に遡って調べるのが手っ取り早いのだが、残念ながらどこに所蔵されているのか不明である（同志社の竹林文庫にあるのかどうかもわからない）。唯一、竹林が書いた「盲目の偉人山本覚馬翁―管見を読む―」が同志社時報一九一（大正十年十月）に掲載されているだけである（『追悼集Ⅱ同志社人物誌』同志社社史資料室に再録）。そこには、

近頃翁の『管見』なるものを得て読む。別名を『皇礎志』といふ。十数葉の写本で、翁が戊辰の変に捕われて薩摩屋敷（即ち現在の同志社敷地）に幽囚せられたとき、同室に監禁せられた野沢鶏一氏に口授して筆記せしめられ、訂正して薩摩の上司に提出せられたものである。翁は盲目であつたから字句の修正は唯聞きて直されたものであらうし、伝写の誤とも思はれる個所があつて、一読遂に了解しがたき点が無いでもないが、滔々として数千言、其の

多方面にして進歩的な一驚を禁じ得ざるものがある。

以下、『管見』の内容に言及されている。ここで注目したいのは、『管見』に『皇礎志』という別称が付けられていることである。しかしながらそういった別称のある『管見』は現在まで知られていない。なお「得て」とあるのは、竹林が入手したというより誰かに見せてもらったという意味ではないだろうか。

この『管見』の成立事情を勘案すると、まず明治政府（薩摩藩主）に提出された原本ともいふべき提出本（清書本）があつたと考える。これが新政府側で何回も書写されて、様々な人に読まれたはずである。しかしながら原本どころか、その転写本の存在すら明らかにならないまま、長い歳月が経過している。

偶然、大西友三郎氏によつて同志社大学の図書館で『管見』の写本が発見されたのは、なんと昭和五十七年のことであつた。<sup>3)</sup> そのためこの『管見』がいつごろ同志社に入ったのか（いつから同志社にあったのか）など、詳しいことは一切わかっていない。

また同志社本は「山本覚馬建白」という書名になっていること、二つの序文の奥書によれば、本書は栗原只（唯一）一本、醍醐忠順本（慶応四年八月写）、島津久徴本（明治二年六月写）と三度写されていることがわかる。最後の明治二年に書写された写本（建白）こそは、同志社所蔵本である（それ以前の栗原書写本・醍醐書写本の所在は未詳）。こうして昭和五十七年までは青山本の翻刻でしか『管見』は見られなかったわけだが、それ以降、ようやく実際に写本（同志社本）が参照できることになり、必然的に両者の比較検討が行なわれた。その結果、青山本には「撰吏」項が抜けているなど、本文にいささか欠落のあることが明らかにされている<sup>4)</sup>。

それとは別に、山本覚馬あるいは野澤雞一の手元にも草稿本あるいは手控え本が保管されていたのではないだろうか。竹林熊彦が見た

『皇礎志』は、あるいはこちらの系統かもしれない。というのも、竹林は原田久美子宛の手紙の中に「山本覚馬伝編纂の過程で新島家にあった「山本意見の論文」云々と記しており、これこそが『管見』のことではないかと思われるからである。ここで新島家というのは、新島八重の所持していた本であろうか。

もともと青山本の体裁は提出本系統のようにも見えるので、青山本が竹林の稿本のままだとすると、竹林が参照したものも提出本系統と考えざるをえない。ただし青山が翻刻掲載している『管見』にも序文が付いているが、掲載の順序は同志社本と異なっている。むしろ提出本と手控え本に大きな相違は認められないことになりそうだ。

いずれにしても現在のところ、伝存する写本は一本しかなく、そのタイトルが「山本覚馬建白」(本文同筆か)となっている以上、『管見』というタイトルを正式書名としていいのかさえも確立されていないことになる。さらに『皇礎志』という別称の付いた『管見』もかつて存在していたことが明らかになった。

### 三

ところで二〇一八年は明治維新(戊辰戦争)百五十周年ということであらためて『管見』が取り上げられ、評価されてもおかしくない年であった。というのも『管見』も書かれてから百五十年経過しているからである。そうはいっても、新たな資料でも出現しない限り、これ以上の研究の進展は望めそうもない(膠着状態)。

そういった中、二〇一八年に京都の古書店から『管見』の写本が売りに出された。偶然私の目に留まったこともあって、幸いにも入手することができた。値段も手ごろだったので個人で購入した。出現のタイミングといい、私が入手できたことには何か運命的なものを感じる。これが新出の影月堂文庫(吉海所蔵)本『管見』入手の顛末である。まず本文共紙の第一丁の右端に「戊辰十一月十日達」と記されてい

るのが目に付いた。「達」は送り届ける意味であろうか。可能性として明治元年十一月十日書写と見ることもできそうである。もしそうなら、同志社本より八ヶ月前に写されたことになる。もちろん書写年代はそれより後である可能性もある。

ここで新出本の簡単な書誌を示しておきたい。表紙はなく本文共紙(楮紙)で、墨付十六丁が仮綴(袋綴)になっている。一面十二行書き。サイズはタテ24・2センチ×ヨコ17・1センチ。状態はやや悪く、上部は水を被って変色している。また部分的に虫損がある。加えて元の所有者が誰かがえんぴつで漢字の読みなどを施している。

一丁表に「管見」と内題が記されているので、これこそまさしく『管見』の写本ということになる。最初に序文風の「小引」がある。その本文をあげておこう。

本邦通信外国の情状を察するに魯西亜日々強大に至るべし。近來北蝦夷地を彼より開拓。依て去る寅年元幕府抜にて彼是の経界論に及びしに従來混茫不毛の地なれば各随意に開き所領とせば天地の道理に相叶べくと彼議論にて其説行るゝの由且先年來箱館へ番兵を置。譬ば碁に先手を下す如し。或人曾て魯人と對話せしに地球をさして曰日本も遂に英(黄)地に變ずべしと。魯国は元英(黄)地に属するものなればかく云しなり。是によりて是を見れば我国を併吞するの萌ならん歟。去る子年魯より対州を侵せしに英人の力にて之れを取戻せり。英人は上海を根拠とし支那本邦と貿易す。故に対州魯に属する時は英の不利也。且魯英仏とも我国を覬覦する勢あれども必兵を以てせず天意人心に基き我弊に乗ずるなるべし。元來仏欺偽を以て関東に交れば英之れを西に防ぎ英礼(私?)意を以て関西に結べば(仏)是を東に誹る。方今仏のナホレオンは前ナホレオンの甥にて一共和政治を主張し其君を廢し其位を奪ふ。誠実を以てなすにあらず。曾て魯よりトルコを侵

し「セハステボル」に戦時に英仏トルコを援く。各其国の利不利を謀てなり。我国彼の三国との交際に於ても亦大に之れに類すべし。之れを防ひて確乎不易の国是を立富強を致すにしかず。国家騷擾の際会に乗ずれば変制も什易きものにて追々文明の御政体施行なるべし。優国焦思の余兼て愚考の拙議を述ぶ。然るに眼力不明不能執筆依て人を雇て之れを認。疎漏杜撰多ければ只識者の取捨を待而已

慶応四年戊辰五月

山本覚馬

文末には覚馬の目が見えないため、人に頼んで口述筆記させた経緯が記されている（今のところ『管見』に野澤雞一の名は記されていない）。そして原本成立の年次が「慶応四年戊辰五月」と記され、最後に署名がある。以下、

政権・議事院・学校・変制・撰吏・国体・建国術・製鉄法・貨幣・衣食・女学・平均法・醸酒法・条約・軍艦国律・港制・救民・髮制・変仏法・商律・時法・暦法・官医

と、二十三項目の見出しと本文が続いている。そして最末尾に「以上終」と記されているので、とりあえず新出本は完本と見ておきたい。

この項目の配列は、同志社本と完全に一致していた。ただし同志社本の最初にある二つの序文がないので、これこそ手控え系統ではないだろうか。あるいは提出・手控えという分類ではなく、単純に序文の有無で分ける方がいいのかもしれない。最初に「政体」（青山本）ではなく「政権」とあること、「撰吏」が項目として独立していることは、同志社本と一致している。その「変制」・「撰吏」も翻刻しておくので、比較の参考にしていただきたい。

#### 変制

皇国の大本御建直しに付ては大平澆季の風習を脱し一新不易の制

度御変革なるべし。君は億兆蒼生の父母たるものなれば強て民を束縛せず各天稟の才力を伸生活を遂しむるに在り。格法を改むるも譬ば人の年に寄り教を施す如く国の開くるの遅速に随ひ能く人情に基き緩急も有る事なれば或は一月に變じ或は三月にして改或は沿習して漸々定る事もありて遂に其令一定して文明の政治四境に達すべし。又人民勸懲の為に新聞紙を作り遍く人に告しらしむべし。

撰吏

「フロイスノ」レーマン曾て余に書を贈りて曰日本は猾吏多くして吏の給料も少く故に吏を減能者を挙げ給を増し与ふべし。又蒸汽道伝信機なるを製し別行に労を省き事有る時は糧米兵器輸送或は軍を催すも速に弁すべく常に津港に艤る船を尽く外国制を用ひ和製の船よりは賦を多く出さしむべし。さすれば自ら外国製と変ずべし。士に至ては無能由遊惰の者多く徒らに刀剣を帶し農工商を侮蔑し却て三民に依て生活する事をしらず此等は尤政治の悪弊也且刀剣も古来国俗の佩る事にて無益にもあらざれども要用の器にもあらず。追々国の開くるに随ひ之を廃止するも可ならん歟云々。此説的当也。先は人材を抽擢し国是を定むべし。

#### 四

なお竹林氏は「翁は盲目であつたから字句の修正は唯聞きて直されたものであらうし、伝写の誤とも思はれる個所があつて、一読遂に了解しがたき点が無いでもない」と、写本の不備に言及されていたが、影月堂本にも不備が認められる。それは私が見つけたのではなく、写本の中に注記されているものである。「救民」項の末尾近くの上部余白に、「此半行読得難シ暫ク元書ニ従フ」とあるのがそれである。

なるほどその行は、

とミ云ん（遊女場へ行事なかれと云也）こと礼れば少く理に戻れ

る如くなれども

とあって、前半の意味がわからない。これを同志社本で見ると、

と異なる（遊女場へ行事なかれといふ也）事なれば少く理に戻れる

如くなれども

とあって（青山本も同じ）、恐らく意味不明箇所は「異」を読み誤ったものと思われる。下の「札」は「な」の誤写であろう。

また最後の「官医」項には二箇所「本ノママ」という傍注が施されている。それは「不待其渴」の「渴」に付されており、これを同志社本で見ると「論」とあるので、「論」の誤写と考えられる。もう一つは「是迄緒て御用ひず」の「緒」に付されている。これを同志社本で見ると「是をおき」となっていた。これは「是迄之を用ひず」の誤写かと判断した。その他、「官医」には誤写が集中しているようにあるので、改めて別稿で論じることにはしたい。

参考までに影月堂本で「女学」の項目の翻刻をあげておく。

国家を治るは人材による事なれば、是を育する緊要なり。日本・支那は婦人に学問を教へず。自今已後男子と同じく学ばすべし。夫婦とも精神十分の智を尽すものなれば、其子は親に優りまた其子も親に優り、追々俊傑を生る其理也。童子は婦人（に）関する事多ければ婦人賢にして教ゆと愚にして育するとは其違ひ甚し。夫れ女は性質沈密のものなれば其性に叶ふ學術国体へ関るものを撰み教ゆべし。且才女は猶学ばすべし。

ここに大きな本文異同は認められなかった。わずかながら、同志社本で「洗密」「考なれば」とあるのは、新出本の「沈密」「ものなれば」の方がわかりやすいようである。

この女性にも学問をさせるといふ考え方は、当時の他の政策（例えば赤松小三郎）には見られない覚馬独自のものらしい。この進んだ考

えが、後に京都府立女紅場の新設に反映され、また新島襄・八重と協力しての同志社女学校の開校につながるものである。その意味でも覚馬の『管見』は、同志社女子大学にとってのみならず、全国の女子大学（女学校）始発の契機として非常に大事な文献であるといえよう。

以上のように、新出写本は現在知られている『管見』の二番目の写本であり、序文がないこと（スリム化あるいはシンプルになっている）で『管見』という書名に合う最初の資料ということになりそうである。また『管見』は転写されている間に誤写が増えているので、相互に比較・校合・修正する必要がある。その意味でも本書の資料的価値は十分存すると思われる。これこそ明治維新（戊辰戦争）百五十周年にふさわしい資料の出現ではないだろうか。

恐らく『管見』はもともとたくさん書写されているはずである。だから今後も新出写本が出現する可能性は残されている。特に島津藩主に提出された原本は、どこかに眠っている（秘蔵されている）のではないだろうか。これを機に、『管見』を含めた山本覚馬の研究が進展することを望みたい。

### 〔付録〕

参考までに、『管見』に関する論文などを探してみたところ、次のようなものが見つかった。目立たないものの、河野氏の『山本覚馬・新島八重兄妹の生涯』及び宮崎十三八氏の『会津人の書く戊辰戦争』には同志社本『管見』の翻刻が再録されている。最近竹内氏が精力的に研究されているが、赤松小三郎の重要性に関しては、ほぼ同時期に伊東氏や平山氏の論でも言及されている。加えて平山氏は論吉の『西洋事情』からの影響を説いておられる。もちろん『管見』は覚馬一人で考え出したものではなく、多くの先人・同輩たちの進んだ考えを集約したものである。それでも目の不自由な覚馬が、幽閉されている最中に口述筆記をさせてまとめたものであることに間違いはあるま

い。薩摩藩にしても、敗者が書いた建白書をよくぞ取り上げてくれたものだ。

- 1 竹林熊彦氏「盲目の偉人山本覚馬翁―管見を読む―」同志社時報一九一・大正十年十月
- 2 青山霞村氏『山本覚馬』（同志社）昭和三年十二月
- 3 青山霞村氏・杉井六郎氏『改訂増補山本覚馬伝』（京都ライオンハウス）昭和五一年九月（再版平成二五年二月宮帯出版社）
- 4 大西友三郎氏「山本覚馬の建白書『管見』の写本について」『ぶりおてか三二・昭和五七年十月』
- 5 大西友三郎氏「山本覚馬の建白書―『管見』の写本について―」新島研究六六・昭和五九年五月（4の再録）
- 6 河野仁昭氏『山本覚馬・新島八重兄妹の生涯』（同志社）平成元年五月（改訂版平成四年五月）
- 7 宮崎十三八氏「京都の山本覚馬『管見』解説」『会津人の書く戊辰戦争』（恒文社）平成五年十一月
- 8 波村雪穂氏『盲目の管見』（彩図社ぶんりき文庫）平成一七年三月
- 9 伊東成郎氏「異才・赤松の遺志を継ぎ、幽閑中に示した渾身の建白書『管見』とは」『歴史街道四・平成二五年四月』
- 10 平山洋氏『『西洋事情』の衝撃と日本人―赤松「口上書」・龍馬「八策」・天皇「誓文」・覚馬「管見」等へ与えた影響について』（常葉叢書 kindle 版）平成二五年六月
- 11 竹内力雄氏「管見」―覚馬のめざしたもの『歴史読本五八―七・平成二五年七月』
- 12 松尾宗次「山本覚馬が『管見』で願った「製鉄」をめぐって」金属83―32・平成二五年十二月
- 13 竹内力雄氏「山本覚馬覚え書（五）―「管見」を中心に―」同

志社談叢三四・平成二六年三月

14 竹内力雄氏『山本覚馬建白（管見）』（蒼穹社）平成二六年三月

15 平山洋氏『福沢諭吉』とは誰か』（ミネルヴァ書房）平成二九年十一月

年十一月

16 吉海直人「山本覚馬の『管見』について―「国体」を中心に―」『学徒出陣75年私学と兵役―同志社の学徒出陣図録』平成三〇年十一月

・同志社所蔵の「山本覚馬建白」は同志社大学学術リポジトリあるいはJAIRROの「山本覚馬建白」(321/Y7)と見ることが出来る。

〔追記〕影月堂本『管見』は、ハリス理化学館同志社ギャラリー第一六回企画展「学徒出陣七十五年私学と兵役―同志社の学徒出陣」(二〇一八年十一月一日〜十二月二十二日)に展示された。

〔追記2〕かつて古書店の目録に「山本覚馬建白書他維新資料ノ一括」が出ていたことを思い出した。当時は覚馬への関心が薄く、また値段が二十四万円と高価だったこともあって見送ってしまった。スクラップ・ブックに貼り付けた目録には、「山本覚馬建白／慶応四年五月」・「建言集一／慶応三ヨリ明治元年」・「雑集／元治元年八月ヨリ」・「千代田迺冬枯／慶応三年ヨリ明治元年」の計四冊が写真入で掲載されていた。「山本覚馬建白」は同志社本の親本か親本の写しのように見える。もっと早く覚馬に注目していればと後悔している。

〔追記3〕インターネットの「京都クルーズ／平成の京雀」というブログには、「山本覚馬建白」というタイトルで二〇一二年三月二十六日から二〇一三年二月一日まで、実に三十五回を超える連載が掲載されている。

## 〔注〕

〔1〕青山霞村氏・杉井六郎氏『改訂増補山本覚馬伝』の「幽囚」には「小松帯刀、西郷隆盛らは先生と面識があり、この『管見』を一読してすっかり敬服し、特に命じて厚く待遇された。のち仙台藩邸の病院に移され、初めて岩倉具視公と面識することとなった。」(58頁)とあり、薩摩藩の小松帯刀や西郷隆盛が読んだと記されているが、その根拠は記されていない。あるいは青山本の「時勢之儀に付拙見申上候書付」の中に、

昨卯六月私儀赤松小三郎を以御藩小松氏西郷氏え其段申述候処御同意に付幕府監察えも申談候得共更に取合不申猶夫是奔走周旋罷在候処

云々とあるので、この記事を『管見』のことと混同されて広まっているのかもしれない。

〔2〕覚馬を推薦したのは京都府大参事だった河田佐久馬(元鳥取藩士)とされている。それが横村正直に引き継がれたわけである。顧問というのも大雑把で、実のところは勸業御用掛のお雇い(嘱託)という身分だったようである。

〔3〕大西友三郎氏「山本覚馬の建白書『管見』の写本について」びおりおてか三二・昭和五七年十月

〔4〕たとえば竹内力雄氏「山本覚馬覚え書(五)——『管見』を中心に——」同志社談叢三四・平成二六年三月など。

〔5〕注〔3〕に同じ。

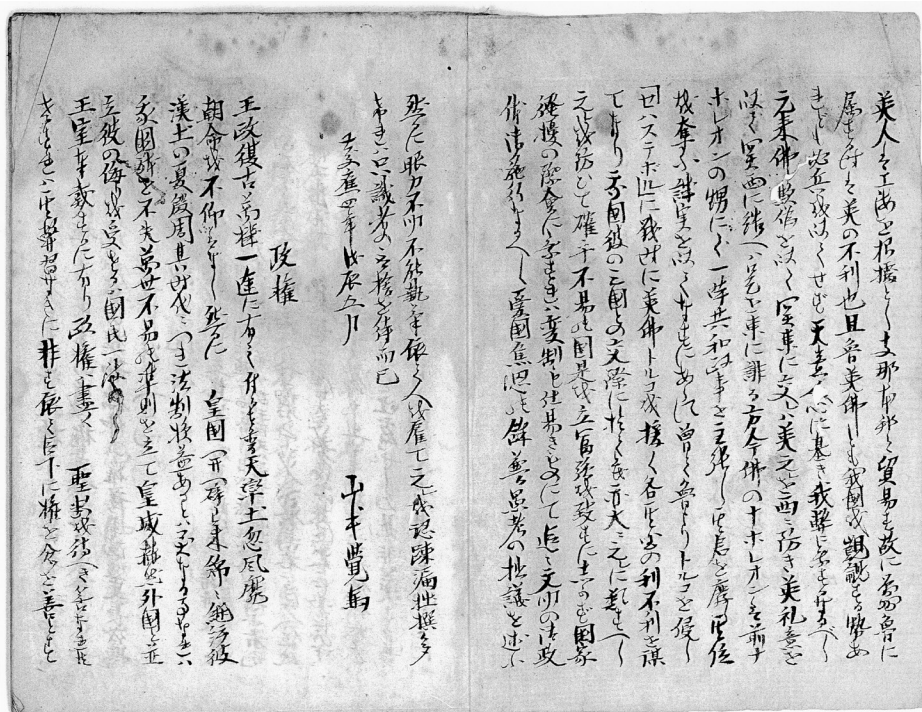
〔6〕同志社英学校の設立に際して、山本覚馬の存在はもつと顕彰されてしかるべきではないだろうか。「同志社」という名前は覚馬が名付けたものだし、敷地(薩摩藩邸跡地)にしても覚馬(京都府)から譲り受けているのだから。同志社のみならず京都府も、明治期の急速な復興の中心人物として、覚馬のことをもつと顕彰していただきたい。京都にとつて覚馬は、初代京都府議会議長や二代目京都商工会議所会頭も務めている大恩人でもある。そして会津若松市も、京都の復興に努めた覚馬を、元会津藩士の活躍として再評価していただきたい。明治期における京都で、覚馬が会津藩の人々をどれだけ雇用していたか、是非検証していただきたい。『管見』がそのきっかけになることを願っている。

戊辰十一月十日

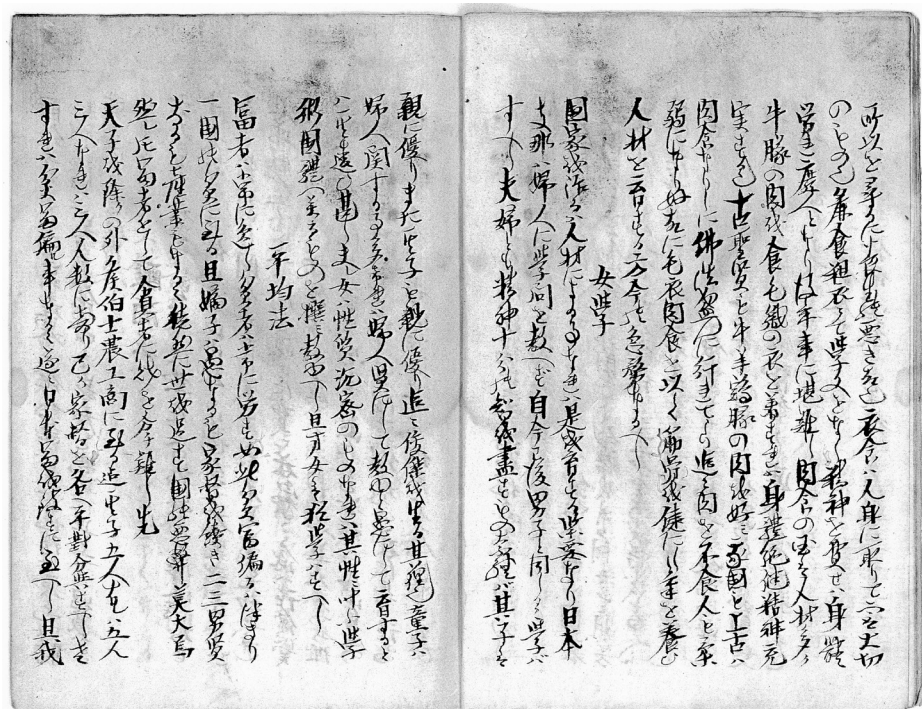
管見

小  
31

中邦通分國の情状と夢をもた魯西並日、強大に對し  
 くる北極表化と修り、開拓依くを夢する元幕府主柄とて  
 彼是は經界論に及び、に怪東瀛茫不毛の北にきくをたまた  
 開き、少強とせ、て此の道理に古く、然の豫論を其の説  
 引ふ、の由、且先年、東名、鼓、番、兵、或、置、初、を、其、名、に、先、年、と、ト、も  
 如く、或、夢、て、魯、人、く、為、語、せ、に、彼、北、球、と、き、て、曰、日、本、と、云、  
 美、北、に、夢、も、ト、く、魯、國、元、美、意、を、屬、さ、る、の、事、き、に、か、く、云、く  
 中、に、是、に、より、て、是、由、見、え、我、國、を、存、春、さ、る、の、前、中、に、  
 子、年、魯、より、為、初、と、發、せ、し、に、美、人、の、力、に、て、之、と、を、成、せ、り



〔図版2〕『管見』一丁裏・二丁表（山本覚馬）



〔図版3〕『管見』九丁裏・十丁表（女学）

端にて國家の美事なり

官醫

夫あはれ治するを國に依るものありき此要の世に故に分國  
の二匠、自北の學問に研究す、技藝精巧なる一級を  
一組一級二組と它國（東とも）分るゝ吾國官醫の  
めきを門地を以てする其巧拙は正成の童子より其福  
も不待其渴るるを知らず併時開るゝ洋醫に現る大に  
業の熟せし者而に輩有きを見込繼ぐ活用じも  
玉體と庸醫に委するを實に悲しむべきもの依る今  
第一、一等の醫を成舉ぐ  
玉體と半護し奉るる切務なり

以上

終